

堀口大學

水かがみ

水かがみ 堀口大學

昭和出版

水かがみ

一九七七年六月二十日初版発行

著 者 堀口大 學

発行者 吉富達彦

発行所 株式会社昭和出版

東京都千代田区猿樂町一―四―五ハ久松ビル 郵便番号 一〇一
電話〇三―二九五―四九四八 振替東京八一―一五八三九六

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 小高製本工業株式会社

定 価 二四〇〇円

©1977 Daigaku Horiguchi 0095-771402-3330

水
か
が
み

題詞 史書大小

大鏡

増鏡

水かがみ

水
か
が
み

目
次

随想篇

水かがみ

小さな自叙伝 11

最初の記憶 14

おそ夏はや秋 19

年寄りの冷水——銷夏報告 23

念慈歌 28

浄瑠璃寺の秋 32

師友・文学

与謝野晶子 39

永井荷風 46

佐藤春夫 48

萩原朔太郎 55

二詩人の死——春夫と達治 62

ルミ・ド・グールモン 65

ポール・モーラン 68

マリイ・ローランサン 72

ジャン・コクトー 84

『月下の一群』の頃 103

波すれすれに 110

ジュネを訳して 115

「三田文学」の思い出 118

外遊・紀行

わが半生の記——最初の外遊前後 123

わが半生の記——ブリュッセルにいた頃

悲劇週間 157

142

断想録

危険な株 171

驪人漫語

173

エロス

裸体のエステチック

189

詩に於けるエロスの領分

199

座談会

詩人の軌跡——堀口大學の世界

213

自選短歌篇

『パンの笛』抄

233

『男ごころ』抄

240

場合の歌

246

自選詩篇

成	ろ	川の里	古梅	わが詩法	ころの歌	わが時点	題す	詩人も	わが山	野分の風が見て来たもの	越びとに	自画像
319	313	308	303	296	290	285	279	273	268	262	256	251
病身又	高田に残す	自らに	ある序詩	魂よ	家紋	近況	日記	中国名陶百選展	美の復讐	秋の小径	母の声	
321	314	309	304	297	292	286	281	275	269	258	252	
	橋	歴史	火打石	雪につぶやく	三位一体	余生	仏家と詩人	自嘲	或る誕生日に	人生	老いたカマキリ	
	316	310	306	300	293	287	282	270	265	259	253	
	詩人又	老雪	白と黒	一壺天	温胎の時間	僕と明治	段違い平行棒	初夢	詩の友	老いてすこやか	紫陽花	
	317	312	307	302	294	288	284	277	266	260	254	
	車中偶	ここ	関			石	わが詩碑に	蝶も				

堀口大學年表（平田文也編）

323

あとがき

343

初稿発表等覚書

346

挿画——ジャン・コクトー

装本——中島かほる

水
か
が
み

小さな自叙伝

明治二十五年、東京・本郷森川町に生まれました。父が当時なお大学の学生だったのと、家が赤門の前にあったので、その二重の意味の天然記念物として「大學」と命名されたのだそうです。この雅号にしてもいいくらい立派すぎる名は、実は本名でして雅号ではありません。子供の頃はこの名のために、鏡二君や政忠君の中に交って、ずいぶんはずかしい思いをしたものです。然し長ずるに及んでからは、いい名だと思っています。まだ一度も他人から読み誤られたことがないだけでも、立派に名の責に任じている名だと思っています。

両親とも純日本種です。こんな分りきったようなことを書くのは、今日でもなお私を混血児だと思っている人が世間にあるので、その蒙を啓きたいからです。ひどいものになると、二年も三年も親しく交際したあげく、私が混血児でないと知って、びっくりしたりする人間があります。こっちがかえってあつけにとられた形で、「だってちっとも混血児らしくないじゃありませんかー」となじると、「だから不思議だ、不思議だと思っていました」というご挨拶だ。とんだご挨拶というやつ。

生れたのは、一月八日の、明け方だそうです。田舎にいた祖母が、その同時刻に、郵便屋さんが、

「郵便！」と一声叫んで表玄関から、大きな大黒さまを投げこんで行った夢を見たというから、嬉しいではありませんか。この夢のおかげで、祖母は終生、私をお大黒さまの申し子だから大切にしなければならぬというので、大いに愛育してくれました。

三歳の時、母に死なれ、父は常時海外にのみおりましたので、祖母の手一つで、十六歳まで甘やかされて育ちました。自分の性格に、お祖母さん育ちだからだと思ふ部分が、多分にあります。尤も他人から見たら、私の性格の全部がそうだと見えるかも知れません。

幼い時から一人遊びの好きな、おとなしい子供だったそうです。好きな食物は海苔と西瓜と人参で、これは毎日でも喜んで食べたということです。好きな遊びは風揚げでした。これは今でも忘れられず、毎年お正月には大風を揚げて楽しむことにしています。小学校も中学校も、父の郷里の田舎でやりました。小学校ではよく出来るいわゆる田舎神童だったらしいのです。ことに綴方が上手でした。中学校へ入学する頃から、文学が面白くなって、詩歌、俳諧、小説の類を手あたり次第に読み漁りました。教室にいても殆ど先生の言っていることなど聴いたことがなく、小説の盗み読みばかりしていたものでした。幸い、六歳の時から始めていた英語が、相当に出来ていたので、他の学科は試験勉強で間に合わせて、ようやく落第をまぬかれる程度の不成績でした。この中学校で松岡譲君と、五年間同クラスでした。

中学の三年位から俳句を作り、一人で楽しんでいましたが、五年の時、吉井勇の短歌「夏のおもひで」と題する連作を、「スバル」の巻頭に見るに及んで、果然、新詩社風の短歌が好きになり、その

試作に熱中しました。翌年十七歳で上京し、新詩社に入り、短歌を習作しているうちに、佐藤春夫と識り、深くこれと結び、ともに語らって慶応大学の文学部予科に入学しました。詩はその頃から作り始めました。三田の学窓にあることわずかに一年あまりで外国へ渡り、帰って来て日本へ腰を落ちつけた時には、もう三十三歳になっていました。まるで浦島のような話ですが、お土産に玉手箱がなかったおかげで、今年四十歳になりましたが、まだ白髪が一本もないのが自慢です。

最初の記憶

日清戦争が始った時である。

本郷の森川町で生れた僕は、その年二歳になって、麴町の元園町へ移って来て住んでいる。英国大使館の横を歩いて鍵の手になった往来が、一度途中で曲る角のところにある二階建ての黒塗りの家である。英国大使館の方からは行って行くと、ちょうど往来の突当りに立っている家なので、よく目につく一軒である。僕の最初の記憶は、この家から始る。

今、思い出すと、この黒い家が一番はっきり見える。その家にあつた庭が見える。庭の隅には数竿の竹さえ生えている。この家に、僕の祖母と、両親と、その年生れたばかりの妹と、田舎の親類から遊学に来てゐる学生さんと、これも国から来ている女中とが住んでいたのである。その中で、母と女中だけが幽霊のように思い出せる。他の人々はただぼんやりした影として、僕の周囲を動いているだけである。

ことに、はっきり記憶に残っているのは女中である。名までまだ忘れずにいる。お竹という娘だった。その当時の思い出の中では、この女中の幽霊が母の幽霊よりもはっきり浮び出る。多分、その頃、